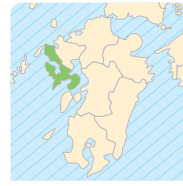


取材日：2015年3月19日



糖尿病



佐世保市ほか近隣

循環型の糖尿病地域医療連携を導入し 地域全体で患者を診る体制を成熟させる。

Point of View

- ① コーチング理論にもとづいた糖尿病療養指導の展開
- ② 初連携施設では、初回受診時に糖尿病センターと地域医療連携センターのスタッフが連携施設を訪問し情報交換
- ③ 医師間のみならず、メディカルスタッフ間にもコミュニケーションチャンネルを
- ④ 患者、かかりつけ医の意見を積極的に反映し、連携パスのリニューアルを進める

社会医療法人財団白十字会佐世保中央病院
糖尿病センター長
松本 一成先生

社会医療法人財団白十字会佐世保中央病院
糖尿病センター副センター長/コーディネーター看護師/日本糖尿病療養指導士
加藤 陽子氏

医療法人真鮭会
えぐち内科ステーションクリニック院長
江口 圭介先生

医療法人真心会
加瀬クリニック院長
加瀬 真一郎先生

連携に積極的な病院で 自然発生的に誕生

社会医療法人財団白十字会佐世保中央病院（以下、佐世保中央病院）糖尿病センターは、日本臨床コーチング研究会認定コーチである松本先生の指揮のもと医師、看護師、管理栄養士がコーチング理論にもとづいた糖尿病療養指導を展開している。「専門家が患者さんに指示、指導するのではなく、患者さんの自覚と自主性を育てる声かけ、質問で自己管理を促す手法です。当センターでは全スタッフがコーチング理論を理解し、療養指導の中心に置いています」（松本先生）

同センターは2009年7月、医療資

源の有効活用を眼目に、地域医療連携パス「佐世保ブルーサークル」の運用を開始した。2015年3月現在、約100施設の医療機関が参加し、約300名の患者が連携に乗っており、普段はかかりつけ医に受診し、6ヵ月に一度、糖尿病センターを受診するサイクルを構築している。一度耳にすると、強く印象に残る名称だ。「『ブルーサークル』は、世界糖尿病デーの色として定着している青を用いた糖尿病のシンボルマークです。加えて、『サークル』は、循環型地域医療連携パスであることも意味しています。

関係者や患者さんに親しみやすく受け止めてもらいたいと考え、この名称を採択しました」（松本先生）

佐世保ブルーサークル誕生のきっかけは、どんなところにあったのか。「当院が院内連携、地域医療連携に積極的で、当時すでに循環器（PCI/AMI）地域医療連携パスが成功を収めていたことが大きいでしょう。糖尿病に関する連携パス開発の要望は院内から自然に生まれました。

ちなみに当院では現在、佐世保ブルーサークル以外に、循環器（PCI/AMI）、脳卒中、インターフェロン、がんの地域医療連携パスが運用されています」（松本先生）

佐世保ブルーサークル以前の糖尿病センターの状況を振り返って語る。「すでに外来には患者さんがあふれており、必要に迫られて単発的な逆紹介を実施していました。紹介先は患

者さん自身に決めていただき、紹介状をお渡しする。完全なる一方通行の逆紹介でした」(松本先生)

佐世保ブルーサークルの導入により、佐世保中央病院から患者を送る際には、引き受け施設が初参加の場合、必ず糖尿病センターのコーディネイト看護師と地域医療連携センターの職員が引き受け施設(かかりつけ医)を訪問して情報交換する。連携の理念や連携パスの特徴などを十分に伝達してから運用を開始するスキームができたのだ。

患者の不安を払拭し 逆紹介の概念に変化が

加藤氏は、糖尿病センターの副センター長を兼務するコーディネイト看護師で、糖尿病療養指導士資格保有者。プロジェクトの立ち上げ当初から参加している。

「佐世保ブルーサークル以前、患者さんにも私たちにも、状態が安定した以降は、できるなら外来での待ち時間が少ない地元のクリニックへの通院に切り替えられないものかとの願いがありました。しかし、ひとたび逆紹介してしまって以降、HbA1cの数値が悪化したらどうするのかなどに具体的方策がなく、踏み切れずにいたのです。循環型の仕組みを持った佐世保ブルーサークルの導入で、それらの障壁が取り払われました。

逆紹介では、患者さんには『糖尿病専門医から離れる』ことへの不安がつきまといますし、送り出す側の私たちにも、さまざまな不安や逡巡があるものです。あくまで私個人の受け止め方ですが、導入以降、逆紹介という言葉や概念を頭の中から取り除け、心が軽くなったように感じます」(加藤氏)

当初は糖尿病センターが逆紹介先

【資料】

連携パス「佐世保ブルーサークル」

外来定期受診経過のページ

[かかりつけ医療機関名: _____]

かかりつけ医の先生へ

受診時に以下の内容を施行されてください。結果ができましたらご記入ください。

血糖値(随時でも結構です)、HbA1c、総コレステロール、LDLコレステロール、HDLコレステロール、中性脂肪、GOT、GPT、Cr、検尿(※総コレステロール、LDLコレステロールはいずれかを測定)

HbA1cが3ヶ月連続で8.0%以上となった場合は、基幹病院、佐世保市立総合病院・内分泌内科、佐世保中央病院・糖尿病センターへご紹介ください。
御紹介いただける際は貴院最終受診1ヶ月内に受診案内のページにしたがって再診いただくように、患者さんにお伝えください。

受診医療機関	項目	目標値	基幹病院	基幹病院	基幹病院	基幹病院	基幹病院	基幹病院
			かかりつけ医	かかりつけ医	かかりつけ医	かかりつけ医	かかりつけ医	かかりつけ医
			月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日
			ヵ月後	ヵ月後	ヵ月後	ヵ月後	ヵ月後	ヵ月後
	体重(kg)							
	血圧(mmHg)							
	腹囲							
	◆血液検査		(空腹時・随時)	(空腹時・随時)	(空腹時・随時)	(空腹時・随時)	(空腹時・随時)	(空腹時・随時)
	血糖(mg/dl)							
	HbA1c(%)	6.5未満						
	総コレステロール(mg/dl)							
	LDLコレステロール(mg/dl)	120未満 100未満						
	HDLコレステロール(mg/dl)	40以上						
	中性脂肪(mg/dl)	150未満						
	GOT(IU/L)							
	GPT(IU/L)							
	BUN(mg/dl)							
	Cr(mg/dl)							
	◆尿検査							
	尿糖							
	尿蛋白							
	尿ケトン体							
	その他							
	治療内容							
		食事療法(kcal)						
		運動療法						
		薬物療法						
	コメント・バリエーション							

①基幹病院・かかりつけ医受診時
糖尿病療養地域連携パス連絡帳提示

↓

②必要な検査施行

↓

③月ごとの検査結果を記入する

↓

④医師の診察
糖尿病療養地域連携パス連絡帳の記載

↓

⑤診察後、必要な手技など確認

↓

⑥次回診察の決定
外来定期受診経過のページを
スキャナー実施

↓

⑦定期受診継続し、基幹病院へは
6ヵ月～1年ごとに受診



連携パスは、A4サイズのパファイル。上記の「外来定期受診経過のページ」のほか、患者の基本情報や、医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師、理学療法士が患者に対して生活改善のアドバイスを記入するページなどで構成されている

へ患者を送る流れが主流の連携だったが、2015年前後から、かかりつけ医が糖尿病と診断した患者を糖尿病センターに紹介して連携が始まるケースが徐々に増えている。糖尿病患者を地域全体で診るかたちの骨格が太くなってきたと言えるだろう。

負担軽減が実現し 医療の質向上に寄与

佐世保ブルーサークル導入後、約6年間で、どんな変化があったのか聞いてみた。

「糖尿病センターの立場から明らかなのは、かかりつけ医の先生方との連携によって軽症外来の数が減り、糖尿病センターへの負荷が低減したおかげで、医療の質が向上したことです。連携パス開発の当初から期待されていた効果ですが、運用開始後に実感した負担軽減と質向上は、想像を超えていました」（松本先生）

「連携パスへ書き込まれたコメントの内容や書き方を通し、各々の先生方の考え方が推測されます。さらに、かかりつけ医の先生と交わした会話を患者さんから聞くと、お人柄までイメージできるようになりました。

地域のどのあたりにどのような先生がいらっしゃるのかを把握できるようになったのは、とても意義深いと思います」（加藤氏）

患者のための連携が かかりつけ医の力を伸ばす

参加施設からの評価はどうだろう。「糖尿病の患者さんは重症から軽症まで幅が広く、ひとりの医師がすべてをカバーできないのは誰の目にも明らかです。専門医のいる基幹病院と、地域のかかりつけ医との役割分担によって、その問題を解決しようとの



左から加藤氏、松本先生、江口先生、加瀬先生

試みは必須であると思われます」（江口先生）

「私は外科が専門なので、開業後、かかりつけ医の心がけとして、内科の勉強を自らに課しています。佐世保ブルーサークルへの参加で松本先生をはじめ多くの先生方との知遇を得て、さまざまな勉強をさせていただいている点に大きな意義を感じています。もちろん、糖尿病医療に関する知識も、連携への参加で飛躍的に伸びました」（加瀬先生）

糖尿病の知識獲得について、江口先生が大いに同意する。

「私は循環器内科が専門ですので、糖尿病治療の経口薬の知識などは、ゼロに近い状態から連携に参加しました。そんな私でも、佐世保ブルーサークルが万全のサポートをしてくれるので安心して患者さんを引き受けられますし、糖尿病センターからのアドバイスで最新、最善の治療を行っています。

同時に、加瀬先生がおっしゃるように糖尿病に関する私自身の知識も目に見えて充実してきています。患者さんの持参する連携パスに書かれた専門医のアドバイスや指示は勉強

になることばかりです」（江口先生）

かかりつけ医の先生方に学んでいただく点に関しては、松本先生も強く意識していると言う。

「日本糖尿病学会の治療ガイドラインに沿ったスタンダードな治療と処方を心がけているのは、それも念頭にあってのことです。必要があれば、患者さん個々の情報欄に、『この患者さんにはこういう特徴があるため、あえてガイドラインからはずれた治療方法を選択しています』と書き添えます。連携パスを介した患者情報の交換を通じて、かかりつけ医の先生方にガイドラインへの理解を深めていただきたいと願っています」（松本先生）

スタッフも学び、成長し チーム医療の力を強化

かかりつけ医が糖尿病地域医療連携に参加する際の留意点について。

「たとえば、私の専門とする循環器疾患は、内科治療のほとんどが薬物療法に委ねられます。

一方、糖尿病医療は、薬物療法に並んで食事療法、運動療法が重要な

ファクターとなる。つまり、療養指導が治療の成果を大きく左右するわけですが、そこをしっかりとフォローしてくれる専門施設との連携があれば、専門医でない私たちも安心して患者さんを受け入れられます。佐世保中央病院の糖尿病センターのフォローは万全です」(江口先生)

加瀬先生は、自身単独ではなく、看護師や事務スタッフを含めた自院全体で連携に参加しているという意識を持つ。

「糖尿病医療は、すでにチーム医療なくしては成立しないものになっています。私自身が勉強するだけでなく、当院スタッフ全員が学び、力をつけねばなりません。

その点でも佐世保ブルーサークルは頼もしく、糖尿病センターのコーディネート看護師の方や、地域医療連携センターの職員の方が、当院スタッフに情報提供を意識的に行ってくれたり、定期的な勉強会で学びの機会を設定してくれたり、チーム医療の実施のあと押しもしてくれます」(加瀬先生)

「連携パスの運用は、参加施設の看護師、事務スタッフの方の協力なしでは成立しません。初回時の説明におじゃまするときには、その点を強く意識し、医師のみならず幅広い職種とのスタッフとお話するよう心がけています。

そこでできたチャンネルを利用して、たとえば検査データや処方不明な場合などは、私から看護師、事務スタッフの方に電話をし、すぐに対応してもらい体制ができています」(加藤氏)

顔の見える関係が肝要 患者意識の変化も生まれた

佐世保ブルーサークルが成功した

秘訣について。

「勉強会や初回の説明、日常のコミュニケーションを通じ、当センターと参加施設の間に顔の見える関係が構築された。それが、後の連携がスムーズにいったもっとも重要な要因だったと思います。

加えて、当院スタッフが連携パスのリニューアルに熱心で、参加施設や患者さんの要望を順次反映させながら、使いやすく参加しやすい連携パスに育ててくれました。患者さんも参加施設も気長に見守ってくれ、発展する連携に育ててくれた点に心から感謝しています」(松本先生)

加藤氏は、佐世保ブルーサークル導入以降に患者の意識変化が起きていると感慨深げだ。

「佐世保ブルーサークル以前、糖尿病センターに受診する患者さんのほとんどは、医師や医療機関に身を委ねるだけの依存型の受診スタイルだったと思います。

この連携に乗った患者さんたちの多くは、ファイル形式の連携パスとお薬手帳を持って基幹病院とかかりつけ医の先生方の間を行き来するうち、患者として持つべき自覚や自己管理、生活改善の必要性についての意識を高めているように感じます。自身に関する検査データや医師間のコミュニケーションを、ファイルを開いて読み、理解することで人任せの思考がどんどん改善されていく。とても喜ばしいですね」(加藤氏)

最後に、今後の課題について話してもらった。

「佐世保ブルーサークルで最新、最善の医療を提供できる体制ができ上がりましたが、私たち医療提供者はそこに安住しているわけにはいきません。糖尿病医療は今後も猛烈な勢いで進歩していくでしょう。常に最新で最善の治療方法をキャッチアップ

できるよう、関係者一人ひとりが努力をつづける使命を帯びています」(江口先生)

「見方を変えれば、この連携で医療を提供できているのは、医療機関を受診している患者さんだけです。まだ糖尿病を自覚していない潜在的な患者さん、診断はされているが治療を中断した患者さんなどをめれなくすくい上げ、佐世保ブルーサークルに乗せる仕組みづくりができないものではないでしょうか」(加瀬先生)

「佐世保ブルーサークルに乗った患者さんが当センターの予約外来を訪れた際、療養指導と連携パスのチェックで、おひとり1時間以上を費やします。

今後対象となる患者さんについては、さらなる増加が見込まれます。患者数が増えても、現在の質を保つために体制整備は欠かせない懸案となるでしょう。当センタースタッフ全員で知恵を出し合い、そこを乗り切る努力をしなければと考えています」(加藤氏)

社会医療法人財団白十字会 佐世保中央病院

〒857-1195
長崎県佐世保市大和町15
TEL: 0956-33-7151

医療法人真鮭会 えぐち内科ステーションクリニック

〒857-0862
長崎県佐世保市白南風町1-13
JR九州佐世保ビル206
TEL: 0956-20-1178

医療法人真心会加瀬クリニック

〒857-1151
長崎県佐世保市日宇町649-9
TEL: 0956-32-5656